

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷九十二第

行發日一月八年四和昭

論叢

清涼飲料稅論 法學博士 神戶 正雄

限界經濟學と制度經濟學 文學博士 米田庄太郎

勞銀の理論 文學博士 高田 保馬

說苑

經濟學史基礎論 法學士 石川 興二

幕末の商社 經濟學士 菅野和太郎

セイの販路說に就て 經濟學士 谷口 吉彦

シニピイトホフの景氣循環論 經濟學士 靜 田 均

雜錄

伊太利の財政經濟近況 經濟學士 有井 治

經濟理論と經濟史 經濟學士 堀江 保藏

近着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

說苑

經濟學史基礎論

石川 興 二

一 經濟學史基礎論の意味

經濟學史は事實一科の學として講究されつゝあるのであるが、而かもそのものを學として確立せしむる諸原理が十分に反省自覺されて居らぬが故に、それが學としての確立は尙ほ十分でないのである。今日經驗科學は自然科學と精神科學とに分たれるのであるが、經濟學史を一科の學として確立すると云ふことは云ふまでもなく精神科學として確立することである。而してこれが爲には精神科學一般の學的原理より經濟學史の學的原理が明に規定されねばならぬのである。

而してカントが初めて自然科學の學的原理を明にせしごとく、精神科學の學的原理を初めて明確にせしものはディルタイ (Wilhelm Dilthey 1833-1912) であつて、これ彼が「精神科學の認識論の創造者」(der Schöpfer der Erkenntnistheorie der Geisteswissenschaften) といはれる所以である。

1) Ueberweg, Geschichte der Philosophie. Teil IV. S. 551

故に私はこゝにデイルタイによつて明にされたる精神科學一般の學的諸原理より經濟學史の精神科學としての諸原理を明らかならしめ以て經濟學史を精神科學として確立せしむる基礎を置くことに努めたいと思ふのである。

而もこれを思想的に溯つて考ふるならばデイルタイの思想は十九世紀の當初に於て精神を自然への隷屬より解放せしめんとせし人々の代表者であつたヘーゲルに結ぶものであり、更に溯つてヘーゲルが其思想の精體をこれに得しアリストテレスに結ぶものである。即ちアリストテレスはギリシヤに於て精神科學の原理を明にし、今日の精神科學論の源泉をなして居るのであつて、デイルタイもアリストテレスをもつて最も早く精神科學の原理を明にせしものとして推獎して居るのである。而してまた彼はヘーゲルよりも大なる影響をうけて居るのである。斯くてデイルタイによつて明にされたる精神科學一般の學的諸原理より經濟學史の學的諸原理を明ならしむるに當つてまたこれ等の人々の重要な思想をも省みることが必要なのである。

扱て總て人間の精神的活動の創造物の成立にはアリストテレスの所謂四原因即ち目的因(Causa finalis)形相因(Causa formalis)素材因(Causa materialis)動力因(Causa efficiens)なるものがあるが、一つの學としての經濟學史も亦人間の精神的活動によつて成るところのものなるが故にその成立には經濟學史の四原因なるものが必要ならぬのである。即ち經濟學史は何等かの研究對象を(形相因)何等かの研究方法によつて(動力因)何等かの研究素材から(素材因)何等かの究極目的の爲に(目的因)認識することによつて成立するところのものである。

故に經濟學史を確立せんが爲にはこの四者を究明しなければならぬのであつて、その第一は經濟學史對象論であり、第二は經濟學史方法論であり、第三は經濟學史素材論であり、第四は經濟學史目的論である。而してこの四者は經濟學史の確立の基礎をなすものなるが故に合せて經濟學史基礎論と呼ぶことが出来るのであらう。而してこゝには先づ經濟學史對象論より考察したいと思ふのである。

二 經濟學史對象論

經濟學史對象論は經濟學史の研究對象の何なるかを、而してこの研究對象の本質的構造の何なるかを明確ならしめんとするのであるが、これを前提とすることによつて經濟學史の研究方法を、研究素材、研究目的は確立しうるものなるが故にこのものは經濟學史基礎論の中心をなすところのものである。而して先づ經濟學史の研究對象の何なるかといふことを明確ならしむることより始めよう。

先づディルタイに従つて精神科學一般の研究對象を規定せんに彼は「歴史的社會的實在 (die geschichtlich-gesellschaftliche Wirklichkeit) をそれが對象とする諸科學の全體が精神科學 (Geisteswissenschaften) なる名稱の下に總括せられる」と述べて居る。即ち精神科學全般の研究對象は歴史的社會的實在である。而して各々の精神科學はこの歴史的社會的實在の部分內容 (Teilinhalt) をもつてそれが研究對象として居るのである。然らばこの歴史的社會的實在及びその部分内容を

精神科學的對象たらしむるところの本質的なる性質は何であるか。彼はこれを「精神科學的作用連關の内面的目的性」(der immanent-teleologische Charakter der geistigen Wirkungszusammenhänge) 又は創造性なるものであるとして居る。即ち歴史的社會的實在は全體として一の作用連關であり、更にその中には諸種的作用連關が含まれて居るのである。而して「此作用連關なるものは心的生命の構造に従つて諸價值を生産し諸目的を實現することによつて自然の因果連關より區別されるるところのものである。……私はこれを精神的¹⁾作用連關の内面的目的性と呼ぶ。而もそれは偶然に又はそこへに於てはないのであつて、精神的作用連關の中に於て理解に基いて諸價值を生産し又は諸目的を實現することが正に精神の構造なのである。……歴史的生命は創造する。それは諸文化財及び諸價值の生産に於て絶へず活動して居る。」²⁾斯くして「精神科學は此作用連關とそれが諸創造物とに於てそれが對象を有するのである。」³⁾而して「精神界に於ける此諸價值及び諸文化財の絶へざる創造を負へるものは諸個人と諸個人が其中に於て相共に作用するところの諸文化體系及び諸共同體である。」⁴⁾こゝに共同體と云はれるは即ち彼の所謂外的體制 (die äussere Organisation) であつて彼はこれを文化體系 (die Systeme der Kultur) と共に精神科學の對象たる社會的作用連關の主要なるものとなして居るのである。デイルタイはこの二者の性質を詳論して居るのであるが、今これを彼の語によつて一言するならば、「人間性の或る成素に基いて居りそれ故に永續するところの目的が諸個人における心的行爲を相互に關係せしめ斯くして一つの目的連關に結びつける時、又は永續的なる原因が諸個人の意志を全體に於ける一つの結合に合一する

1) 2) 3) 4) Dilthey, Der Aufbau der Geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften. S. 153.

時、社會的分析の對象であるところの永續的なる形成物が成立するのである。而して我々が前者の事實を把握する限り我々は社會の中に於て文化體系を區別するのであり、また我々が後者の事實を考察する限りに於て外的體制が見得らるゝことゝなるのである。」¹⁾而して外的體制の最も代表的なるものは國家であり、また文化體系の最も見易き例は經濟社會に於てこれを見るのであるが、彼は宗教界、藝術界、哲學界、科學界等も文化體系であるとして居る。斯くて彼は諸文化體系を對象とする學と、諸外的體制を對象とする學とを以て社會に關する重要な學であるとし、その兩學の性質を詳論して居るのである。即ちデイルタイに於ては斯くの如くにして總て科學的文化域は經濟生活と同様に文化體系なる作用連關であり従つてこれを對象とする學は文化體系の學 *Der Wissenschaften von den Systemen der Kultur* である。

以上に於て精神科學的對象一般の性質を明にしたるが故に、次にこれを幾分歴史的に考へることによつて經濟學史の研究對象たるべき事實並にこの事實を經濟學史の研究對象として確立する仕方を考察し以て經濟學史の研究對象が經濟學的的文化體系であることを詳にしたいと思ふ。

先づ精神科學の本質を内在的目的性又は創造性に求むることは既にアリストテレスに於て見られるのである。即ちアリストテレスは彼の精神科學であるところの『倫理學』と『政治學』との冒頭に於て、その研究對象の本質を述べてこのことを明かにして居る。先づ『倫理學』は、「總ての術及總ての研究、同様に總ての行爲及追求は何等かの善を目的とするものと考へられる。」²⁾と云ふ句をもつて始められて居て、「倫理學」の研究對象をなす人間行爲なるものが「何等かの善を目的

1) Dilthey, Einleitung, S. 43.

2) Aristotle, Ethica Nicomachea, p. 1094^a

とする」ものであることが明にされて居る。又「政治學」は「總ての國家は何等かの種類の社會である、而して總ての社會は何等かの善を目的として打立てられて居るものである。何となれば人間は常に彼等が善なりと思ふところのものを得んがために行爲するものなるが故である。」¹⁾と云ふ句を以て始められて居る。即ちアリストテレスがその精神科學の對象の本質を示したこの「何等かの善 *arabes* を目的とする」と云ふ語は極めて簡單であるが而も今日尙精神科學の對象を自然科學的對象より區別すべき骨子をなすところのものである。而してデイルタイはアリストテレスが斯のごとく目的連關 (*Zweckzusammenhang*) をもつて彼の精神科學的對象の本質となせしことを大に賞讃して居るのである。然しながらアリストテレスに於て精神科學的對象とされた主體は主として個人及外的體制であつて文化體系なるものはこれ等のものに比しては未だ十分なる對象性を有して居なかつたのである。従つてアリストテレスに於ては經濟生活に關して重要な學的考察がなされて居るとは雖も而も經濟生活の文化體系としての對象性は未だ十分に明にされては居なかつたのである。

然るにスミスに至つて初めて經濟的文化的文化域の文化體系としての對象性が確立されたのである。而して茲にこの事に對する二つの要件が注意されねばならぬ。即ちそれは第一にスミスの當時に於ては既に歴史的社會的實在に於て經濟的文化域が相對的獨立の事實にまで發展して居つたことであり、第二にスミスがこの相對的獨立に高まつて居た事實を經濟學の研究對象として確立する仕方を得得て居たことである。於茲初めて經濟學は經濟學父スミスに於てそれ自身の固有の研究

1) Aristotle, *Politica*, p. 1252a.
2) Dilthey, *Einleitung*, S. 71. S. 229.
3) Dilthey, *Einleitung* S. 39. 參照

對象を獲得することとなり、一科の精神科學として確立さるゝこととなつたのである。かくして經濟學が一科の學として確立さるゝに至れば學的文化域全般の中に於て經濟學的的文化域なるものが相對的獨立の事實となるのである。依つて經濟學史の研究對象となるべき此事實を經濟學史の研究對象として確立する仕方が明にされるならばこゝに初めて經濟學史の研究對象は確立され従つて經濟學史が一科の學として確立されるのである。然らば次に此仕方に就て考察しよう。

今アリストテレスを省みるに、彼は哲學の研究に於てまた精神的諸科學の研究に於て、先づその課題に關する去過の學說の考察をなして居るのであるが、而もそれは單に諸學說としてであつて纏まれる諸學的體系としてではなく、また其等のものゝ間に於ける内面的連關も考察されて居ないのである。經濟學父アダム・スミスに於ては彼は「富國民論」第四編を of the systems of Political Economy (政治經濟學の諸體系に就て) と題し、こゝに彼は重商主義學派と重農主義學派とを論じて居る。而してこれ等の經濟學は未だ十分なる意味に於て經濟學と云ふことは出來ぬのであるが而もスミスはこれ等のものゝ各を一個の學的體系として取扱ひ更に重農主義學派と重商主義學派とを對立せしめて「諺に棒が一方に曲げられ過ぎたならば、それを眞直にするが爲には同様に他方へ曲げ過ぎねばならぬと云ふ」²⁾と述べて重商主義學派に對する重農主義學派の關係を正 (These) に對する反 (Antithese) の關係に置き此等に對して自己の經濟學體系を合 (Synthese) の關係にあるものとせることは學史的事實を單に偶然的なる學的體系の集合とせずそれ等のものゝ間に既に内面的連關を見て居る點に於て注意すべきところのものである。ヘーゲルに至つては

1) 經濟論叢、第二十六卷、第一號參照

2) Adam Smith, Wealth of Nations. ed. by Cannan, II. p. 162.

學史的事實に於ける内面的連關が更に展開せられ學史的事實は一科の學の研究對象としての性質を十分に有するに至るのである。即ちヘーゲルは彼の『エンチクロペディ』に於て哲學史的事實について次の如くに述べて居る。

哲學史を外的に見るならばそれは互に連結のない相異なる原理を有する諸哲學體系の偶然的な接續として見へるであらう。「然しながら數千年に渡るこの仕事の建築家は生き生きした一個の精神 (der Eine Lebendige Geist) である。…哲學の歴史は歴史上に現はれる異なる各々の哲學に於て異なる完成の段階に於ける一つの哲學を示すのでありまた各哲學體系の基礎にある特殊原理は同じ一個の全體なるもの、枝に過ぎないのであることを示すのである。時間的に最後の哲學は先行せる諸哲學の總てのもの、成果であるが故に總てのもの、原理を含んで居なければならぬ、それ故にそれは…最も發展せる最も豊富なる最も具體なる哲學である」。

此命題は哲學史的事實のみならず總て學史的事實統の内面的連關を把握する爲めの根本精神を含んで居る極めて重要なものである。只、然しながらヘーゲルに於けるが如く學史的事實を創造する主體を一個の超個人的なる精神とするならばそれは形而上學的とならざるを得ないのである。デイルタイはその問題に於ては心の底からヘーゲルに結ばれて居るのではあるが而も早くよりヘーゲルの體系に對してこの點に關して反對を感じて居たのである。而して彼は社會的歴史的生命の根源をヘーゲルに於て見られるが如き非常な大きな波となつて展轉して行き諸個人を一緒に運び去る如き超個人的精神に於て求めたのではなく、我々の主觀自身に含まれて居る生命の根

源性に於て求めたのである。従つて彼に於ては學史的事實の背後にヘーゲルに於けるが如き創造し且つ自己を發展せしむるところの本體的な超時間的精神を見たのでなく多くの個人の生命を見たのである。而も彼は十八世紀的なる單なる個人主義の立場に歸り行つたのではなかつたのである。

經濟學史上の諸事實即ち諸經濟學體系をもつて單なる個人の精神の偶然的なる所産としその内面的連關を看過するは經濟學史上の個人主義であり、またこれをもつて一個の本體的な超時間的精神の一貫せる創造なりとするところは經濟學史上に於けるローマン主義である。而してこの十八世紀的なる個人主義の立場と、十九世紀的なるローマン主義の立場とを眞に止揚するところのものは、個人の生命を根源力として成り而も個人の短き生命を越へて永續する歴史社會的實在としての文化體系に於て學の創造力を認むるデイルタイの立場である。

即ちデイルタイの文化體系なるものは既に述べたるごとく、「人間性の成素に基づくところの、それ故に永續的なる目的が諸個人における心的活動を相互の連關にもたらし、斯くして一つの目的連關に結びつける。」¹⁾ことによつて成立つところの永續的なる形成物である。斯くてこの文化體系なるものは個人の本性に基いて成るものであるが而も一度成立せし以上は「個人はこの體系の中に生れ出づるのであり、それ故に個人はこの體系を彼以前よりあり彼以後に存続しその諸の設備をもつて個人に働きかけるところの客觀性として自己に對立して見出すのである。」¹⁾而して既に述べたるが如く、總て文化體系なるものは内面的目的性をもつて本質とし諸文化價值及び

1) Dilthey, Einleitung, S. 51.

諸文化財を生産するのであるが、經濟學的文化的體系なるものはそれに於て經濟學が創造さるゝところの文化體系である。斯くてデイルタイの立場に於ては、經濟學史の研究對象は經濟學的文化的體系として確立されるのであり、従つて經濟學は文化體系の學の一となるのである。

以上に於て經濟學史の研究對象の經濟學的文化的體系なるべきことを明にしたるが故に以下經濟學史が此文化體系を研究對象とすると云ふ意味を詳にし、文化體系の一種としての經濟學的文化的體系の性質をも明にしよう。ヘーゲルに於て主張されたるが如き學的事實間の内面的連關が如何にしてデイルタイ的の立場に於て經濟學史的事實に就て求め得られるかは然る後詳にし得るのである。

先づ、既に述べたるが如く、「精神諸科學は此作用連關とそれが諸創造物とに於てそれが對象を有するのである。」而して文化體系を研究對象とすると云ふことは特定の文化體系に就てその文化體系が創造する創造物とこの創造物がそれに於て創造せらるゝところの作用連關とを明にすることである。今このことを固有の經濟學の研究對象と經濟學史の研究對象とについて明にし以て兩者を對比せしむることによつて經濟學史が經濟學的文化的體系を研究對象とすると云ふ意味を明にしたいと思ふ。

先づ固有の經濟學の研究對象であるところの經濟的文化的體系なるものは、歴史的社會的實在の一部分をなすところのものであつて、そこにおいては經濟的の價值即ち富が多くの人々の作用(Wirken)の社會的並に歴史的の連關(Zusammenhang)によつて實現せられるところの作用連關

(Wirkungszusammenhang) である。而して固有の經濟學はこの作用連關に於て實現せらるゝ創造物である富と、この富を創造する作用連關をその研究對象とするのである。故に例へば經濟學父スミスは彼の經濟學『富國民論』に An inquiry into the nature and Causes of the Wealth of Nations なる題名を附しまた of what is properly called Political Economy, or of the nature and causes of the Wealth of Nations として經濟學なるものゝ研究對象が富の性質と富の原因即ち富を實現する作用連關なることを明示して居るのである。またスミスの經濟學とその體系を甚だ異にする如く考へらるゝマルクスの經濟學『資本論』に於てもその研究對象は要するに富の一種としての商品とこの商品を造り出すところの作用連關としての商品社會又は近代社會又は資本主義的社會である。

斯くの如く固有の經濟學の研究對象は創造物とこの創造物がそれに於て實現せられるところの作用連關であるが、經濟學史の研究對象についても亦同様である。即ち經濟學史の研究對象であるところの經濟學的文化體系なるものは歴史的社會的實在の一部をなす作用連關であつて、そこに於ては經濟學的眞理價值即ち經濟學が多くの人々の作用の社會的並に歴史的なる連關によつて實現せられるのである。而して經濟學史はこの作用連關に於て實現せられる創造物たる經濟學と、この創造物がそこに於て實現せられる作用連關とをもつてその研究對象とするのである。こゝに經濟學と經濟學史との間に於ける密接なる關係が見られる。即ち固有の經濟學は富と富がそれによつて實現せられるところの作用連關とを對象としてこれを學的認識に高めることによつて成

れるものであるが、經濟學史はかくして成れる固有の經濟學なる創造物とこの固有の經濟學がそれに於て創造されるところの作用連關とをその研究對象として居るのである。例へばスミスの經濟學又はマルクスの經濟學は富と富がそれに於て實現せられる作用連關とを研究對象としこれを學的認識に高めることによつて成れるものであるが、經濟學史はこれらの經濟學及びこれ等の經濟學がそれに於て創造される作用連關をもつてそれが研究對象として居るのである。

斯のごとくにしてその研究對象が創造物とこの創造物がそれに於て創造されるところの作用連關であること云ふ點に於ては、經濟學史に於ても經濟學に於ても同様であるが、然しながらこの創造物が研究對象として有する重要度は兩者に於て同一でないのである。而してこのことは經濟學史の研究對象としての創造物がそれ自身の個性的生命を有する永續的存在物なることに基くのである。

即ち經濟學の研究對象をなせる創造物たる富なるものはスミスが國民の富を「各國民の年々の勞働はその國民の年々消費する一切の生活必需品と便宜品とを之に供給する根本の資源である」と云へる如くに年々生産せられ而して消費されゆく富であつて、キャンナンが特に *Capital Wealth* にあらずして *Income Wealth* なりとすることゝなるものである¹⁾。然るに經濟學史の研究對象をなせる創造物たる經濟學體系なるものは「持續的なる創造物」²⁾であり、而も「其創造者より離れて自己の生命と法則とをそれ自身に持つて居るところの製作物」³⁾であること繪畫、彫刻、脚本、法典、宗教書、哲學體系等同様である。例へばスミスの經濟學にしるマルクスの經濟學にしる經濟學

1) *Wealth of Nations*. I. p. 1.

2) Cannan, *Theories of production and Distribution*. p. 142 以下參照

3) Dilthey, *Aufbau*. S. 158.

4) *Ibid.* S. 156.

史上の偉大なる創造物はそれが創造者たるスミス又はマルクスを離れてそれ自身の個性的生命を有して永存するところのものである。

斯くて創造物の研究対象としての意義は經濟學史に於て遙に大であつて諸經濟學體系はその各々の個性的意義に於て重んぜられ「その永續的なる創造物の中に包含されて居る連關」が重要な研究対象をなして居るのである。例へばスミスの經濟學又はマルクスの經濟學に包含されて居る經濟學的連關がその全體的なる連關に於てまたその個性的なる意味に於て經濟學史の重要な研究対象となるのである。

斯のごとくにして經濟學史に於ては創造物たる諸經濟學の中に含まれて居る連關の分析が重要なものとなるのであるが而もこれと共に諸經濟學がそれに於て創造されるところの作用連關が研究対象として重んぜられるのである。即ち持続的なる創造物としての諸經濟學體系は經濟學的文化體系に於ける精神的生命の表現であり客觀化されたものであるが「精神的生命の諸の容觀化が完成されたものとして言はゞ靜止せるものとして分析さるゝ場合には更に進んでそれ等の客觀化がそれに於て生成したところの作用連關を把握すると云ふ課題が常に成立つのである。」²⁾否更に適切に言ふならば創造物たる諸經濟學の中に含まれて居る連關はこれがそれに於て創造されたる作用連關に結ぶことによつてのみ十分に把握し得られるのである。

斯くて經濟學史に於ける創造物の研究対象としての意義を既に考察したる我々は、更に進んで經濟學なる創造物がそれに於て創造せられるところの此作用連關の經濟學史的研究対象としての

1) Dilthey, Aufbau. S. 153.

2) Dilthey, Aufbau. S. 157.

意義を幾分詳にして見よう。

歴史的に存立せる經濟學は直接には何人かの個人による創造物たるものであるが然しこの個人は決して孤立的にこれを創造し得たのではなく他の多くの經濟學者との作用連關の中に在つて初めてこれを創造し得たのである。故に一つの經濟學は直接には一つの經濟學者の創造物である云ふことが出来るのであるが、これを更に具體的に見るならば經濟學的作用連關の創造物である。而して此作用連關は、既に述べたるが如く、一の文化體系なる性質を有するものである。

總て文化體系なるものは「一の文化的業績を實現する最も單純且最も同質的な作用連關であつて、教育、經濟生活、法律、宗教、藝術、哲學、科學等はこれである。」¹⁾今この文化體系なるもの一般的な諸性質を擧げることによつて經濟學的文化的體系の性質を明にして見よう。

先づ總て或種の文化體系に於ては一種の業績が實現せられ、諸個人はこの業績の實現に於て互に結ばれて居るのであつて各個人の作用はこの業績を實現する作用連關の成素をなすのであるが、經濟學的文化的體系についても亦同様であつて、こゝに於ては經濟的實在を學的認識に高めるどころの業績が實現せられるのであり、この業績の實現のために多くの人々が結ばれその各人の作用はこの業績を實現するどころの作用連關の成素をなして居るのである。經濟學史上の天才の仕事例へばスミスによる『富國民論』の創造又はマルクスによる『資本論』の創造は、これら天才の心に於ける統一なる過程に高き程度に於て結ばれて居ると雖も彼等は彼等の仕事の専らなる創造者ではないのである。

1) Dilthey, Aufbau, S. 166.

先づ一つの經濟學の成立と雖も同時代の多くの人々との社會的なる作用連關に立つことによつてのみ初めて可能となるのであつて例へばアダム・スミスは當時の重農主義者及び重商主義者との作用連關に立つて彼の經濟學を創造したのであり、同様にマルクスは當時の多くの人々との作用連關に立つて彼の經濟學を創造したのである。而してこの社會的なる作用連關に結ばれて居る人々の地位は他の文化體系に於けると同じく一樣のものではない。即ち經濟學的文化體系は常に新なる要求を充さんことを求めて居るものであるが、新なる經濟學體系を創造することによつてこの要求をよく充したるものは經濟學的文化體系に新なる發展をもたらしたるものであつて、この文化體系に於ける特に生産的なる人物としてその生産物は經濟學史上に永續する生命を有することゝなるのである。例へばスミス、マルクス等がかゝる意味に於て眞に創造的なる人である。而して一つの創造者の經濟學體系を特に尊重しこれを繼承發展せしむることを主とする人々は一つの學派を形成することゝなるのである。

一つの經濟學の創造と雖もそれは同時代の人々との社會的なる作用連關に立つて居るのみならず更に前時代の人々との歴史的なる作用連關に立つて居るのである。即ち既に述べたるが如く偉大なる學的産物はそれ自身の永續的なる生命をもつて存続するものであつて各時代の經濟學的文化域はこれに先立つ種々なる時代における經濟學的文化域の秀てたる生産物を保持し、これを基礎としこれが支配の下に新なる經濟學の創造を爲し新なる發展を遂げて居るのである。例へばアダム・スミスの經濟學は遙か數千年前に成れるアリストテレス、プラトン等の學的體系よりも支

配をうけて成れるものであり、同様にマルクスの經濟學はアリストテレス、スミス、リカルドウ等の多くの學的產物の影響の下に成れるものである。斯くして經濟學的文化體系に於ては、他の文化體系に於けると同じくそれが現在はその中に常に過去を保持し絶へず將來を創造してゆく發展なる作用連關なのである。

斯くの如くにして經濟學的文化體系は社會的並に歴史的なる作用連關に於てその過去は現在の中に働き現在は過去を土臺として絶へず將來を創造しゆく一全體としての發展的生命である。この發展の構造は社會的なる個人なるに拘らず總ての精神的生命に通ずるところの本質的構造であつて我々はその原型を自己の生命の發展に於て有して居るのである。而してこの本質的構造に基いて生の歴史性は把握し得られるのである。即ち生は常に時に於ける経過であり従つて時間性 (zeitlichkeit) をもつてその基礎的なる規定とせるものであり而もこの時間性は常に過、現、未の三様態に於て現らはれて居るのである。而して此三つの異なる時の觀點に於て生を見る時、生の三つの様態が我々に現らはれるのである。而してデイルタイはこのことを次の如くに述べて居る。「我々は想起に於て回顧することによつて生の過程の経過されたる諸部分の連關を意義の範疇の下に把握する。我々が現實によつて充されてゐるところの現在に生きて居る時には我々は感情に於て現實の積極的又は消極的價值を經驗する。而して我々が自分を將來の方へ伸ばす時この態度から目的の範疇が成立する。」¹⁾

今このことより經濟學史が研究對象とする經濟學的文化體系の歴史性なるものが明となるので

1) Dilthey, Aufbau. S. 201.

ある。即ち經濟學的文化的體系の發展的生命を過去に向つて回顧し「生の過程の経過されたる諸部分の連關」(der Zusammenhang der abgelaufenen Glieder des Lebensverlaufs) 即ち學史上に現はれたる諸經濟學體系を意義の範疇の下に於て把握せんとする時こゝに經濟學的文化的體系の歴史性を研究對象とするのである。而して總て精神的生命の歴史なる内面的連關は生の経過に於ける各部分がその全體に對して有する意義即ち Bedeutung の範疇によつて把握されるものである。かゝる意味に於て經濟學史は經濟學的文化的體系の歴史性を研究對象とするものである。

斯くして經濟學史が經濟學的文化的體系の發展的生命に於て研究對象とするところは明にされたるがゆゑに、次に同じく經濟學的文化的體系を對象とする他の學との關係を述べることによつてこのことを更に明にしよう。即ち經濟學的文化的體系の發展的生命を過去に向つて回顧する歴史的態度によつて經濟學史的對象が成立したのであるが、今これと異り將來に向つて其形成發展の目標及び規則 (Ziele und Regeln seiner Fortgestaltung) を求むる實踐的態度に於て此に對する時、經濟學實踐論とも呼び得るところのもの、研究對象が成立するのである。而して總て發展は過去の存在の發展なるが故に經濟學史論は經濟學實踐論の土臺となるのである。更にまた過去の存在は本質上將來へ發展すべきものなるが故に經濟學的文化的體系の發展の目標及規則を論ずる經濟學實踐論は後に述べんとする經濟學史目的因論に結ばるゝこととなるのである。今經濟學的文化的體系に向つて過去への回顧の態度に於てでもなく、また將來への發展の態度に於てでもなく、現在の態度に於て對する時、それは價值批判の關係において現はれ來るのであつて、この價值批

1) Dilthey, Aufbau. S. 233 參照

2) Dilthey, Einleitung. S. 21.

判は歴史的研究の終をなすものであると共に、實踐的研究の初めをなすものである。即ち經濟學史の研究に於ては歴史上に現はれたる諸經濟學の連關の把握が主たるものであるが、更に進んでそれが價值批判せらるゝことは後に經濟學史方法論に於て詳にせんとするところである。また經濟學實踐論に於ては形成發展の目標及び規則が論せられる前に所與なるものゝ價值が批判されねばならぬのである。

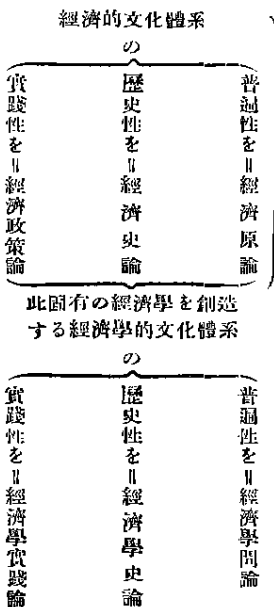
斯く經濟學的文化體系の歴史性を對象とする經濟學史論の其實踐性を對象とする經濟學實踐論に對する關係は明にされたのであるが、次に經濟學的文化體系の理論性又は本質性を對象とする經濟學問論に對する關係が明にされねばならぬ。即ちこのものは經濟學的文化的體系の歴史的个人的なるものゝ中に常に働いて居るところの普遍的本質的なるものを對象とする研究である。而して個性(Einzelheit)又は普遍性(allgemeinheit)と特殊性(Besonderheit)とを止揚したものであり、従つて歴史的个人的なるものはその中に働いて居る普遍的本質的なるものゝ特殊化として明確に把握し得らるゝものなるが故にこの普遍的なるものゝ研究はまた經濟學史研究の理論的前提又は基礎をなすものであつて經濟學史對象論に於ける對象の構造論は即ちこれである。而もまた普遍的なるものは歴史的个人的なるものゝ研究を待つて更に明となるのである。

斯くして經濟學的文化的體系に就て、その過去に顧みたるものとして歴史性が、將來へ望んだものとして實踐性が、又常にあるところのものとして普遍性又は本質性が研究對象とされ三つの學が成立つのであるが、同様にして經濟的文化體系についてもこの三者が對象とされるのである。

即ち歴史性を對象としたるものは經濟史論であり、實踐性を對象としたるものは經濟政策論であり、普遍性又は理論性を對象としたるものは經濟理論である。斯くして經濟學史の廣義の經濟學に於ける地位を研究對象の關係より示めせば次の如くである。

廣義の經濟學

固有の經濟學



以上に於て經濟學史の研究對象が經濟學的的文化體系なるべきこと及び經濟學史が經濟學的的文化體系を研究對象とすると云ふ意義を考察して以て經濟學の研究對象の何なるかを明にしたるが故に、稿を改めて此研究對象の本質的構造を明にしよう。